

■学位論文内容要旨

## 生活指導論に基づく大学の授業づくりに関する一考察

—田中容子実践を手がかりとして—

鬼頭 恭子 (2019年度修了)

### 1. 研究の目的と背景

本研究の目的は、高校英語教員である田中容子による「生活指導論に基づく授業実践」を手がかりとして、学習者の「学びたい」を引き出す課題や授業展開により、学習者一人ひとりの「主体」を育てる「学習者主体授業」を明らかにすることである。

大学授業改革は、大衆化を背景に学習者の能動的な授業参加をめざし改革が行われてきた。その上で、2012年にアクティブ・ラーニングが明示された。しかし、本来の「主体的な学び」、すなわち学習者の「学びたい」という内的側面の能動性や「主体」となる学びが大学授業改革に欠けていたのではないかとの問題意識から、本稿では、大学生の学習と主体形成（人間的成長）の統合を目指す必要があると考えた。生活指導論では、教科の授業をとおしての学習と人間的成長の統一が、以前より目指されており、本稿では、高校生活指導の実践に着目した。

### 2. 各章の概要

第1章「現在の大学生像」では、今日の大学生の多くは、アイデンティティの形成を阻まれてきたこと、そのため、社会システムや人間関係に不安を感じていること、その不安から身を守るために個人化していることが明らかとなった。これらの背景は、大学生個人の問題ではなく社会的な状況が教育に組み込まれてきたことにある。今大学生に求められる教育とは、不当な社会のからくりに基づき、その不当なことに異議申し立てができる力を育てること、個人化ではなく、他者へ向かって、世界へ

向かって関係を変えていき、つながりを持った仲間との共同する姿をめざす教育である。

第2章「大学における生活指導論の可能性」では、「生活指導論」とは何か、生活指導論における授業の位置づけを考察した。なかでも、高校生活指導の理論的指導者である、竹内常一の授業論に着目した。

竹内にとって授業とは「教材を媒介にして、教師と子ども、子どもと子どもとが世界に立ち向かい、そのヴェールをはぎとり、それを変革するために、出会い、対話し、協同することである」。ヴェールをはぎとるとは、与えられてある世界と、その中にある自分自身を客観的に捉え、自分自身と世界、それに関わるものやことやひとを具体的に認識することである。その世界には不当な社会のからくりも含まれている。そのような授業は、生徒自身のものの見方や感じ方や考え方に変革を起こす。竹内の授業論は、「自分と世界の間をつくり変える」学びであり、アイデンティティの追求（自分づくり＝世界づくり）をする授業論であった。そのためには、①教材を媒介にして子どもとともに世界に立ち向かうような授業を構成すること、②対話をとおして世界を対象化していくような授業とすることが授業には求められる。

自分と世界の間をつくり変える授業には、対話や共同による他者との関わりが必要である。しかし、現在の子どもたちは、基本的信頼を失っている状況にあり、対話の原基となる相互応答するケアの関係づくりの必要性を竹内は唱えている。ケアとは、一人ひとりの生徒を具体的な個人として尊重する関係づくりである。そのような関係づくりは、生徒の中に「信」が育つと竹内は述べており、「信」とは自己と他者、自己と世界に対する「基本的信頼」のことである。竹内が追求してきた生活指導では、生徒達の自律と共同を集団づくりと呼び実践して

きており、対話が重視されてきた。竹内は、その対話の原基として相互応答するケアの関係づくりの重要性を唱えている。そこで、本稿では、竹内の授業論として、以下の要素を捉えた。

教師は、①教材を媒介にして子どもとともに世界に立ち向かうような授業を構成するために、現実世界をつなぐ教材を選ぶこと。②対話をとおして世界を対象化していくような授業とするために、授業展開においては、さらに、a.教材、授業の構成や展開を工夫すること、b.対話や応答、表現する場を提供すること。③集団づくりをとおして、自律的な共同を育むこと、ただし、対話の原基として相互応答するケアの関係づくりが求められる。

生徒は、そのような授業を通し、ものの見方、感じ方、考え方を世界に開かれた知にする、世界を変革する自由と希望と勇気を自らの中に育むことができるようになる。

竹内が子どもたちに自治する主体となることを求めるのは、未来の世界を変革するのはほかでもない生徒たち自身であるからだ。世界は、人から与えられてあるものではなく、自由につくっていけるのだということを自覚させること、そのために勇気と希望を育むことが教育には求められているのである。

第3章「田中容子の生活指導論に基づく授業の実践」では、以上のような相互応答するケアの関係づくりを基底にし、自分と世界の間をつくり変える授業づくりの実践として、田中容子の授業実践を分析した。高校の英語教員である田中容子の授業実践では、数々の教材づくりの工夫が捉えられた。例えば、寝ている生徒との関係づくりから、キング牧師の演説の教材がつくられた。その教材は、I have a dream that …と、生徒の夢を語る英作文の教材となった。夢を語るということは、自分自身がどうありたいのかと自分自身に問うことになる。その教材そのものがアイデンティティの追求になっている。さらに、What is your dream?疑問文に発展し、\_\_

has dream that\_\_などへと、表現活動、共同活動へと発展させ生徒と生徒をつなげる教材となっている。このような個別具体的なクラスメイトが主人公となる教材は、夢なんてないと言っていた生徒も他者からの影響により、さらに自己との対話が繰り返される。これが、自分と世界の間を意識化する営みであり、田中の教材づくりは生徒を主人公にする教材になっており、授業の中でその意識化が鍛えられている。また、キング牧師のスピーチからは、背景の社会事情を知ることにつなげている。それは、竹内の世界のヴェールをはがす教材となっている。世界にある差別が、遠くの世界の課題なのだろうかと生徒は自らの世界とつなぐ。その世界は遠く突き放されたところにあるのではなく、自分は、その世界の中にいる主体なのだと思えることが竹内の授業論で提起されている「世界を対象化する」ということである。さらに、田中の実践は、授業を通して集団づくりがされていることが特徴である。竹内の説く一人ひとりとのケアの関係の構築から始まって、「わかる」ことから「できる」ことへつなげ、授業をとおして生徒の自信を積み重ねている。「信」を満たした生徒は、他者意識が生まれ、自律的に共同するようになる。このように、生徒の自信は授業を通して積み重ねられており、授業が、集団づくりを連関させる仕組みとなっていることを捉えることができた。

低意欲で受動的な大学生には、まずは自己の「信」を育てることが求められる。世界を意識し、同じ世界にいる他者を意識し、信頼を育みながら、ひいては自分自身への信頼を積み重ね、学習の主体として成長することができるような授業が求められる。生活指導論に基づく授業づくりは、学習者のアイデンティティを追求するような自分と世界の間をつくり変える授業論であり、大学生にも有効な授業論の1つとして提起することができる。